

TAEKOのきまぐれ日記

2011.9.19

ネイティブのような英語を話す、海外経験のほとんどない友人のはなし

今通っている大学院に、ネイティブのような英語を話す20代の同級生がいました。彼女は授業中、最低一回は発言することを自分に課していて、同じ授業に参加していれば、必ず彼女が流暢な英語を聞くことができました。英語を流暢に話す、といえば海外留学の経験が長かったのかとすぐに想像するところですが、彼女はわずか数ヶ月のホームステイの経験しかないことを知り、大変驚きました。

そうこうしながら、別の授業にでていると、これまたネイティブなみの自然な英語を話す別の20代の同級生に遭遇することに。もちろん、そこで、「どのように英語をみにつけたのですか？」と聞いたわけです。二人ともに共通していたのは、ネイティブスピーカーの録音を、いやというほど何回も聴き、一字一句変えずに、イントネーションも全くそっくりに覚える作業を数年ものあいだ集中的に繰り返した、そうです。風呂の中でも、道があるときも、電車にのっているときも、です。こんな生活を学部時代4年間つづけた結果、ネイティブが話しているのが聞こえてくると、反射的にリピートしながら覚え始めてしまうと、前者の達人は言うておりました。

ここで、ポイントになるのが、二つ。
イントネーションそのままに一字一句を覚え込んでしまう、ということと、
覚えるのに耳から英語を何回も入れ、口に出して同じ回数だけ発音してみる、

ことです。レシピだけみても、料理の腕があがらないのと同様、料理は実際作って現実の空気の中に存在させなければ腕はあがらない。書いたものを目でおうのではなく、聞いたものを、口をつかって空気を振動させる、ということでしょうか。

ところが、すべての欠点をカバーしたメソッドというものが存在しないのは当然で、このメソッドにも欠点はあったようです。覚えてしまったフレーズの中に言いたい事がおさまっているうちは何の不自由も感じないらしいのですが、独自かつ複雑なことから表現しようとする、表現貯蔵タンクの中に必ずしも必要な表現が見つからないことがあります。そのときは表現をあきらめてしまう傾向がある、という事らしいです。この点をカバーするには、自分の意見を心の中で錬ってから、紙などのうえで一旦英語をつくってから、それを見ないで、しゃべってみる、という方法が良いのかもしれない。

今日、ネットのEnglishCentralというサイトにアップされていた、ネイティブのような英語を話す韓国の女の子のビデオ、見ました。

「留学中、カナダのクラスメートの言う英語を全部リピートして言っていたら、みなが私のことを可愛い、と思ってくれたみたいで、沢山の友達ができ、英語がうまくなった」とインタビューに答えていました。

思えば、英語の学習方法もこの50年間でたいそう変わったはず。音を手に入れるのがむずかしかった時代から、ネットでいつでも、何回でも音が手に入る時代。耳と口、フル活用のおすすめです。



この写真、昭和37年の英語教育番組録画の際の記念撮影だそうです。